様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００６４５

研究課題名（和文）古代日本語における表記体と表記環境にみる＜萬葉仮名＞と＜仮名＞との相関

研究課題名（英文）A Study of the Interrelationship between <manyou-kana> and <kana> Observed in the Ancient Japanese Writing Style and Writing Environment

研究代表者
尾山　慎（Oyama, Shin）

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：２０５３５１１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：上代日本語における表記研究において、文字論と表記論が重要であることはこれまでも指摘されてきたが、仮名の実態をみるためには、訓字との比較、語の単位で統計調査をとるべきことの有意性が明らかになった。また日本語の語種の一翼を担う漢語について、語形も字音で取り入れることも広義に訓読の一形態と捉え、倭語で受容する狭義の訓読と並行的に捉える有効性を指摘できた。これにより漢語を大別して、語形としての漢語と、表記上の漢語とし、この漢語受容が、すなわち字音仮名の成立、運用に大きく関わっていることを見通した。以上の研究成果は、単著『上代日本語表記論の構想』（花鳥社2021）にまとめて発表済みである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
もともと、言語学領域において文字表記論は立ち後れていると言われ続けてきた。とりわけ、上代は表記が漢字だけによるため、後代の平仮名論、あるいは仮名成立論からしても後れを取っていた。今回の課題は、上代内部の文字表記論であると同時に、後代を扱う文字表記論との連携も模索したものであった。この点も、単著『上代日本語表記論の構想』にまとめた。
古代の文字文化は、中国、朝鮮半島の文字文化を不可分の関係で考究することが求められる。今後ともこの課題に取り組み、成果をあげることは東アジア共同体ともいうべき一つの文化の実相を記述することに繋がる。歴史的研究はすなわち東アジア文化圏の現状と未来を思索することにも繋がる。

研究成果の概要（英文）：In the study of ancient Japanese, it is important to distinguish between characters and notations, and it is significant to compare kana (phonetic characters) with kunnji (phonetic characters) and to conduct a statistical survey of words rather than characters alone. In addition, we took a parallel view of the acceptance of kango (Chinese), one of the word varieties of Japanese, by adopting it with Chinese pronunciation (on-yomi) and by replacing it with Japanese (kun-yomi). The results of the above research have already been published in a monograph, "Ancient Japanese Characters and Notation" (Kacho-sha 2021).

研究分野：日本語学

キーワード：文字　表記　表記体　仮名　萬葉集　古代

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

萬葉仮名はいかに、平仮名、片仮名となったのか、という問いは日本語学史上の定番の一つとも言えるものだった。しかも、たとえば上代木簡のそれと、古今集高野切（平仮名）、あるいは東大寺諷誦文稿のそれ（片仮名）等とを比較すれば、字体・字形が変わったこと自体は一目瞭然であるともいえる。それでも、問いが残っているとすればどういうことか――それは、何が連続的な命脈を保っていて、何が断ち切られているのか、という点である。これは、必ずしも全貌が解明されたわけではない。そもそも上代は、仮名のまとまった一次資料は木簡の名詞表記のそれらに偏り、主たるデータを提供するのは結局転写資料である記紀萬葉になってくる。そうすると、少なくとも、字体、字形という書記論的見地だけで押していくのは、現状では資料的限界からの行き詰まりが想定されるため、必然的に、機能や用法という理論面から突き詰めていくほうへシフトすることになる。そこで資料の位相を勘案した字母レベルの継承を巡る精査が行われてきた。どの字母がどの位相にあらわれ、かつ次世代に残るのか、あるいは一方、どの字母が淘汰されたのか、といった考究である。さらには漢字の一用法として存在するそれ――つまり上代の萬葉仮名が、いつ、どのように、漢字のような意味喚起から解放され、文字の素材としても表音といえる状態に移行するのかといった機能・用法上の考察観点が、これまでの研究の主たる切り口であった。無論それらの問いは必要だったし、成果も上げたけれども、やはり字母一字ごとにバラして静態展示的に整理を加えるという方法論の、その限界が見えてきていると思われる。これら伝統的ともいえる問いに対する答えは、依然として留保されたままであった。そこで本課題は、これらのいずれとも異なる、萬葉仮名から次世代への仮名の、連続と不連続を照射するべく、「語」を記すものとしての仮名、という実際に用いられる動態に寄り添う形――「表記体」と「表記環境」を基軸に考究していくこととなった。

２．研究の目的

上代の日本語表記における、「表記体の形成」および「表記環境の構成」の精査を通して、次代の平仮名、片仮名への道筋をより明らかにする。前者「表記体の形成」論とは、特定の語の表記に収束する形で使用される仮名と、そこから相対的に解放されているとみられる仮名を巡る考察である。語の表記と密着しているものは、後代の連綿を伴う平仮名に通じる特徴を持つ。対して、解放されているものは各個別の音節との紐帯によって汎用性を高めており、後代の片仮名に通じる特徴をもつ。後者「表記環境の構成」論とは、その仮名がおおむね仮名ばかりで占められる環境にあるのか、もしくは漢字(訓字)に親和する形として存在しているのかという違いを考証していくものである。前者であれば後代の平仮名的特徴をもつと言え、後者であれば片仮名的特徴をもつと言える。つまり、上代の仮名には、二つの次元で、平仮名的特徴と、片仮名的特徴を持っていると見通され、これらの検証を通して従来説ではふれられなかった上代の仮名から次世代の仮名への連続と不連続とを明らかにする。

３．研究の方法

上代の仮名を「表記環境の構成」をもとに仮説的に２通りに分けてみると、表音用法でほぼすべて書かれる表記（とそれを構成する仮名）および訓字と仮名の混交表記――その際、訓字に親和、あるいは寄生する仮名とがある。前者は後代の平仮名文的であり、後者は漢字文に混ざる片仮名的なものといえる。仮名ばかりで占められているのは「表記環境」においては後代の平仮名的である。そして、それとは別に「語の表記体」をどれほど認めうるかで、もう一つの「片仮名的」か「平仮名的」かという観点が露出する。例えば付属語「カモ」はほとんど「可聞」表記で占められ、モで大量に使用されるはずの「毛」（集中約 1700 例）はあまり参与しない。ここに固定的綴りなるものが存在することが認められる。つまり、萬葉仮名は二つの意味での、平仮名的要素及び片仮名的要素を、それぞれにもっている可能性がある。これまで次世代にどの字母が継承されているか、あるいは字体（字形）の変容をいかに追うかという観点が専らだったが、それだけではなかなか解決に至らなかった。そこを打開する観点が本研究のとる方法では明らかになる。3 年間の研究では、以上のような表記体と表記環境に着目したデータベースを作成し、その分布を統計的に検証することで、萬葉仮名の本質と次世代仮名との関係を明らかにしていった。年度ごとの方法は次の通り。

【2019 年度】表記体に関するデータベース作成（一部は作成済み）分析、検証
【2020 年度】表記環境に関するデータベース作成（一部は作成済み）分析、検証
【2021 年度】２年分の研究の総括、分析、考察を行う

たとえば、古事記歌謡の仮名と、日本書紀歌謡で並ぶ比較的画数の多いそれは、随分字母が違う。字音も漢音と呉音とで違うとされる。だから両者が弁別されるのは自明でもあった。しかし、漢字であり、その表音用法である点も共通するし、それだけで表記を構成（和歌表記）しているという点で、記紀歌謡は通じ合うという言い方もできる。古事記歌謡も、日本書紀歌謡も仮名だけで書かれるという平仮名的「表記環境」は共通している。従って、研究史も踏まえれば〝同じだが違うし、違うが同じ〟とでもいうことになる。

萬葉仮名から仮名へ、という題目の立て方は、あたかも、予め単線的展開がそこにあったように思わせるが、実際は、ある面に光をあてればそれまで照らされていた面が影になる、つまり一方をみれば一方が隠蔽される――しかし実は両方とも事実としてある――そのような分析観点の多面体であることを念頭におかねばならない。＜平仮名的＞（表記環境次元）なものが、＜片仮名的＞（表記体次元）でもあったりするということだ。〝同じ〟だとみえていても〝違う〟と見出すこと、そしてその反対も――それが、上代の仮名からその先を照らすと考える。

４．研究成果

これまでの、〝萬葉仮名から仮名へ〟と問いをたててきた研究の足場は、草仮名というのを中間においた字形、字体の変遷、すなわち書道的な観点をふまえたものであった。しかし、草仮名は、芸術的に後代にも残るので、仮名の変遷の中途にだけに措くのはふさわしくなく、過渡期としてのそれをもう少し分類すべきであるし、そもそも、それ以前に、上代の一次資料が特定の位相にほぼ限られているため、書道史的観点は必須と思われるものの、その限界がどうしても現状では露呈していると言わざるを得ない。

次いで、位相論としても研究史では、仮名字母群が完全に相補的に棲み分けられているわけではなく、広く位相を超えて使われる、基層となる字母群があるといわれてきた。基層となる仮名があり、さらに位相によってそれ以外の仮名字母の所属に棲み分けがあるという二層性であって、首肯されるものであるが、こういった研究は、基本的に字母の所属と位相を巡る、いわば字母を単体にバラした検証であったともいえる。そこで、本課題では、語を記す綴りとしての仮名の集合という観点や、どういった文字列中に存在しているかという点を問うた。この成果は、『上代日本語表記論の構想』（花鳥社,2021）にて発表した。本課題の成果というべき節を列挙する。第１章・第１節・「表記体」、第５章　「歌」との対比で見る上代「散文」表記論の構想の第１節　訓字と仮名で書かれる「散文」と「散文」中の「歌」、第２節　表記体の通史を上代から描く構想――「歌」と「散文」――

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 尾山　慎	４．巻 17
２．論文標題 上代の「漢語」―その語形と位置づけ―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 第17回若手研究者視点プログラム	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尾山慎	４．巻 231
２．論文標題 書評　澤崎文著『古代日本語における万葉仮名表記の研究』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 萬葉	６．最初と最後の頁 74-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尾山慎	４．巻 230
２．論文標題 紹介　内田賢徳・乾善彦編『万葉仮名と平仮名　その連続・不連続』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 萬葉	６．最初と最後の頁 66-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐野宏	４．巻 60
２．論文標題 雄略天皇御製歌――文脈付帯語の形成について――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 古代文学	６．最初と最後の頁 25-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉岡真由美	4．巻 48
2．論文標題 〈資料紹介〉鹿持雅澄『古史徴神世字論評』翻刻（上）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 叙説	6．最初と最後の頁 16-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉岡真由美	4．巻 12
2．論文標題 〈資料紹介〉鹿持雅澄『古史徴神世字論評』翻刻（下）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 古代学・聖地学	6．最初と最後の頁 52-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尾山慎	4．巻 0
2．論文標題 ＜漢語＞から考える上代日本語表記論	5．発行年 2019年
3．雑誌名 上代額論叢	6．最初と最後の頁 191,214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尾山慎	4．巻 100
2．論文標題 上代日本語の文章・文体と表記―読み手・書き手の観点から考える―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 美夫君志	6．最初と最後の頁 50,62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尾山慎	4．巻 47
2．論文標題 理論的設定に滲みだす〝現実〟―文字・表記研究の方法論思惟片々―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 叙説	6．最初と最後の頁 239,257
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尾山慎	4．巻 39
2．論文標題 木簡の表記と仮名と言葉	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国語語彙史の研究	6．最初と最後の頁 29,46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐野宏	4．巻 0
2．論文標題 言霊の構造	5．発行年 2019年
3．雑誌名 上代学論叢	6．最初と最後の頁 415,438
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 尾山慎
2．発表標題 上代日本語の表記・文章再考―読み手・書き手・分析者の観点からの理論構築―
3．学会等名 美夫君志会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 尾山 慎	4．発行年 2021年
2．出版社 花鳥社	5．総ページ数 356
3．書名 上代日本語表記論の構想	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐野　宏 (Sano Hiroshi) (50352224)	京都大学・人間・環境学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	吉岡　真由美 (Yoshioka Mayumi) (40882395)	奈良女子大学・文学部・特別研究員 (14602)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関